

香川大学教育学部 附属教育実践総合センターニュース

No. 26

平成19年7月27日発行

目次

特集 平成19年度教育実践総合 センター事業について ----- 1	第1回(6月期)教育実践集中講座報告 ----- 6
センター事業計画 ----- 2	退任・着任のご挨拶 ----- 7~8
研究プロジェクトについて ----- 3	寄贈図書 ----- 9~10
附属坂出小学校教育研究発表会報告 ---- 4	活動報告・お知らせ ----- 11
附属高松中学校研究発表会報告 ----- 5	教育実践総合研究第16号原稿募集 ----- 12

特集 平成19年度教育実践総合センター事業について

附属教育実践総合センター長 西原 浩

7月に開催された管理委員会で、平成19年度のセンター事業計画が認められました。

センター事業の主要な1つの柱である研究プロジェクトについて、昨年度はセンターの専任教員の専門分野に関係した4件のプロジェクトを実施しましたが、もう少し総合化をする必要があるのではないかとの意見も寄せられ、今年は「授業づくり・授業改善に向けた教師の「評価力」の向上に関する研究プロジェクト」と「「わかる授業」のためのメディア活用に関する研究プロジェクト」の2件で実施することといたしました。特に前者は4人の専任教員全員が共同して行い、後者は香川県教育センターとの共同研究として実施されるものです。いずれも2年間の予定で、今年は初年度にあたります。各プロジェクトの概要は本センターニュースの3頁に示されております。学部、附属学校、県教育委員会、県教育センター、公立学校の先生方の協力を得て進めて参りたいと存じますので、よろしくお願ひします。

公開講演会の開催もセンターの主要な事業の一つになっています。間もなく新しい学習指導要領改訂の方向性が明らかになるものと思われませんが、公開講演会などを通して、皆様方にその内容をお知らせしたいと思ひますので、その折は多数の先生方のご参加をお待ち申し上げております。

本年度は客員教員(客員教授)として、昨年に引き続き、高松市立桜町中学校教頭の小柳和代先生と新しく香川県教育委員会義務教育課主任指導主事の安藤紳一先生に就任していただいております。すでに6月・7月に第1回教育実践集中講座を担当していただきました。

また今年4月より、教育方法学の専任教員として、山岸知幸准教授が赴任しました。前任者同様、宜しくお願ひします。

平成19年度 教育実践総合センター事業計画

I 研究プロジェクト

1. 授業づくり・授業改善に向けた教師の「評価力」の向上に関する研究プロジェクト
2. 「わかる授業」のためのメディア活用に関する研究プロジェクト

II 指導プロジェクト

1. 教員養成

- (1) 「教育実践演習」「教育実践基礎演習（フレンドシップ事業）」の担当
- (2) 教育実践集中講座
- (3) 情報教育関連の授業開講
・教育工学 ・情報メディアの活用
- (4) 教養教育「教育について考えよう」

2. 教員研修

- (1) SCS遠隔共同講義への参加
「授業実践研究・教師教育」「情報教育・メディア研究」「教育臨床」
- (2) 教育学研究会、軽度発達障害研究会、予防的教育相談研究会、道德教育研究会の開催

3. 教育相談

- (1) 教師のための相談活動（学習指導、生徒指導等）
- (2) 教育相談活動

4. 学部・大学院関連授業科目

III 教材・資料の収集・管理・共同利用

1. 研究資料(他大学からの研究紀要等及び香川県教育委員会関連出版物)等の収集・管理
2. 教材、機器等の共同利用のための物品などの整備
3. 特殊装置の有効利用のための整備
4. 学習コンテンツの収集

IV 研究活動の報告等

1. 「香川大学教育実践総合研究」の編集
2. 教育実践集中講座資料集の発行
3. フレンドシップ事業報告書の発行

V 広報活動

1. インターネットのサイト（ホームページ）の更新・管理
2. センターニュース（年3回程度）
3. 教師教育用映像情報のVOD配信サービス
4. リーフレットの改訂・発行等

VI 講演会・研究会等の開催

1. 公開講演会
2. 教育実践総合センター研究会
3. その他 * 「未来からの留学生」等の学部・大学院事業と連動させる。

VII 関係機関との連携

1. 研究・指導プロジェクトに関わる関係機関との連携
2. その他地域の各機関との連携
(1) 香川県教育委員会教員研修への協力
(2) 香川県教育センター及び高松市教育文化研究所への研究協力

平成19年度 研究プロジェクトについて

※

★授業づくり・授業改善に向けた教師の「評価力」の向上に関する研究プロジェクト

教育において、わかる授業、楽しい授業を展開することは、学力の向上はもとより生徒指導面からもたいへん重要な課題である。また、教師に求められる資質能力として、授業を設計・実施し、授業を振り返り、課題を見出し、改善する力を身に付けることは最も必要なことである。しかし、それらが個々の教師の力量にゆだねられたり、個々の教師によって求める授業像が異なることによって、結果として授業を受ける子どもたちの学力形成に差があらわれることは、望ましいことではない。

そこで、授業討議会など授業を振り返る場において、どのような評価の視点をもとに検討すればより望ましい授業づくり・授業改善につながるのかについて様々な観点から検討し、教師の「評価力」の向上に関する研究を行う。

※「評価力」：より望ましい授業づくり・授業改善に向けた自らの授業を自己点検する力

★「わかる授業」のためのメディア活用に関する研究プロジェクト

教育において、「わかる授業」「さらに知りたい・わかりたいと思える授業」を展開することは、学力向上とともに、主体的に学び続け自らを高めようとする人材の育成という観点からも重要な課題である。

一方、文部科学省「教育の情報化に関する検討会」によれば、学校教育の情報化について「定量的指標では教育の情報化は遅れている」としながらも、「ITの質的な利用等についても重視すべきである」と述べられており、メディアを活用した教育実践の質的な向上と、教育効果の検討が求められているといえる。

そこで本研究プロジェクトにおいては、初等中等教育において児童生徒が「わかる授業」「さらに知りたい・わかりたいと思える授業」を展開するためのメディア活用の在り方について、実践事例を基に検討を行う。

平成19年度研究プロジェクトの参加募集

教育実践総合センターの平成19年度事業計画が確定し、研究プロジェクトを上記の2テーマとして企画推進することになりました。いずれの研究プロジェクトも、教員養成や教師教育、学校教育にとって基本的なテーマが設定されています。

学部・附属学校園の先生方には、いずれかのプロジェクトに積極的にご参加下さいますよう、ご案内申し上げます。ご参加いただける先生方には、8月24日(金)までにセンターのメールボックスに申込書をご提出下さいますよう、お願い致します。

第91回 附属坂出小学校教育研究発表会報告

香川大学教育学部附属坂出小学校

5月24日・25日に開催された第91回教育研究発表会は、県内外から700名を超える参加者をお迎えし、盛会裏に終えることができました。

今年度は、研究主題を『「思考力」をはぐくむ学びの創造 —脳神経科学との連携—』と掲げ、「思考様式（思考に関する手続き的な知識）の長期記憶化をめざした授業づくり」「脳の活性化を図る時程編成」「家庭との連携」という3つの視点からの取り組みについて、提案しました。

「思考様式の長期記憶化をめざした授業づくり」では、これまでの授業実践から見出した長期記憶化に有効な4視点（「意欲・情動の喚起」「精緻化」「簡略化・焦点化」「繰り返し」）に基づいて教材を開発し、授業提案しました。測りにくく、育てにくい、しかし、学力の中核をなす、と言われる思考力を育てる上での「思考様式」の重要性、そしてそれを長期記憶化することの価値を訴えかけ、参会された多くの先生から高い評価をいただきました。

「脳の活性化を図る時程編成」では、1日の時程の中へ「時間帯」「実施時間」をどう位置付けるのか、具体的に提案しました。「朝5分間の計算ドリルを行うことで脳を活性化し、活性が低下し始める4時間目前に2分間の音読をする」という今回の提案については、今後さらに検証を進めていく予定です。

「家庭との連携」については、昨年から発行している子どもの生活習慣向上プリント「Do you 脳？」を紹介しました。研究会後の反響も大きく、参加された先生方の関心の高さを改めて感じることができました。

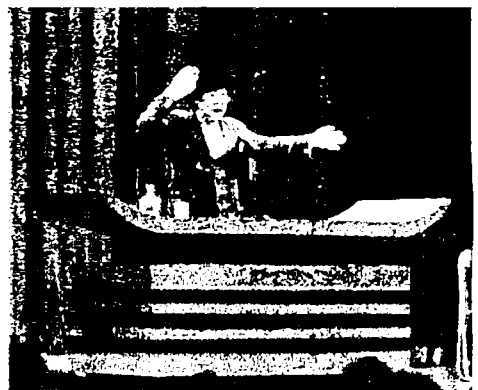
また、1日目のシンポジウムでは、中村克樹先生（国立精神・神経センター）の司会のもと、脳神経科学を活かした実践に取り組んでいる長崎大学教育学部附属中、立命館小学校からゲストを迎え、教育実践や今後の展望についての議論がなされました。2日目には、「脳と学習」という演題で、茂木健一郎先生（ソニーコンピュータサイエンス研究所）の講演会が行われ、約400名の参加者は熱心に耳を傾けていました。

今後も、学習指導の在り方に軸足を置きつつ、脳神経科学との連携をさらに深め、子どもたちの学びに効果的な支援の在り方を探っていきたいと思っています。

研究発表会に際してのご指導、ご協力に対して深く感謝申し上げます。



【3年理科の授業風景】



【茂木健一郎先生による講演】

附属高松中学校研究発表会報告

香川大学教育学部附属高松中学校

附属高松中学校では、平成19年度研究発表会を6月8日に開催しました。研究主題を「新しい学びを拓く－体験と理論の往復にもとづく教科内容の見直し－」として、全体提案に続いて各教科の提案授業を公開いたしました。文部科学省磯田文雄先生からは本研究への助言を、早稲田大学安彦忠彦先生には「次期学習指導要領と中学校教育の展望」と題してご講演をいただきました。授業の後の討議会では貴重なご意見をたくさんいただきました。以下、発表しました研究の内容を簡単に報告いたします。

本校では昭和52年以来一貫して教育課程の開発に取り組んでいるが、改めて生徒や社会に目を向けてみると、実生活とかけ離れてきているという今日の学校における学びの現状がある。確かな体験、確かな理論とするためには、体験のみ理論のみを別々に学ぶのではなく、体験と理論の間を往復しなければならない。この時期の子どもは、理論と体験の両方を往復することで、新しい理論を構築したり、具体的な生活の中で物事を正しく認識することができるようになる。そして何より、その往復にこそ学びがいを感じることができるはずである。そこで、研究主題を「新しい学びを拓く－体験と理論の往復にもとづく教科内容の見直し－」とした。

研究を進めて、学習内容を体系化・教材化する過程で現実世界との関係が切れてしまったために教科内容が細切れになっている部分が確認された。本校ではこれまでも、各教科が教育課程全体を意識して指導内容を編成することを共通理解しながら研究を進めてきたが、これまで「関連」としか示してこなかったものを、一歩進めて「体験から理論に向かわせること」と「理論から体験に向かわせること」とで往復させるという視点から教科内容を見直していくことにした。

体験から理論に向かうとは、例えば観察をして法則を見つけるといった帰納的な手法を意味する。反対に理論から体験に向かうとは、例えば実生活にどれくらい理論的に説明できるものが入っているのかを発見することを指す。各教科において、「体験から理論に向かわせること」と「理論から体験に向かわせること」とが量としてどちらかに偏っていること自体は認められる。それはその偏りこそが教科の特性によるものであり、特性を持った様々な教科と教科外とが集まった教育課程全体としてバランスがとれていればよいからである。具体的に、一つの教科の中で往復が成立することもあれば、他教科や教科外との間で往復することもある。しかし、指導者の意識が「体験から理論に向かわせること」または「理論から体験に向かわせること」の一方に偏っているとしたら、全体としてのバランスがとれるはずもなく、それこそ生徒にとって細切れでバラバラなカリキュラムとなってしまふ。指導者の役割は生徒に体験と理論の往復をさせることにある。今後は、学習指導要領の改訂をにらみながら、見直した教科内容をより具体的に提案したいと考えている。



人権を守る裁判－裁判員制度から考える－

平成19年度（6月期） 第1回教育実践集中講座

香川大学生万歳！

附属教育実践総合センター 客員教授 安藤 紳一

目の前から生徒が消えて2年が過ぎた。毎日、文書の処理に追われてパソコンに向かいながら、遙か彼方にかすかに見える子どもたちの姿を思い浮かべ、再び子どもたちの笑顔に会えるまで最低でももう1年我慢しなければ・・・と涙をこらえていた。

ところが、そのチャンスは突然訪れた。再び教壇に立って授業ができることになった。しかし、相手はこれまで教えていた中学生ではなく大学生。さらに、ここ数年来、「分数のできない大学生」「荒れる成人式」などの言葉に象徴されるように、一般的に大学生の評判もあまり芳しくない。ちょっぴり不安を抱えながら、第1回の講義の日を迎えた。

今年は、これまでの集中講座とは違い、最初の2回は阪根先生の「教育法規入門」の講義の中で実施させていただくことになったため、教室には約100名もの学生が待っていてくれた。「起立、礼」「お願いします」、久しぶりに味わうこの瞬間を懐かしく思うと同時に、驚きを覚えた。「この光景は中学校と同じじゃないか。しかも、あいさつの声は中学生よりも大きい。これが大学生か・・・」。気をよくした私は、若々しい学生の視線にちょっぴりハニカミながら「県教育委員会のハニカミ王子です！」と口を滑らせると、これまた弾ける笑顔で応えてくれる。その後、「現場の法規ケーススタディ」と題した学校運営や生徒指導に関する講義・演習においても、よくうなずき、よく笑い、よく考えてくれた。与えられた時間はあっという間に過ぎ去った。講義後も、多くの質問や感想が寄せられた。そして、2回目は、準備していた資料が足りないほど、多くの学生が来てくれた。

3、4回目は、土曜日の午後から、生徒や保護者とのコミュニケーション、いじめや不登校問題への対応、キャリア教育の進め方などについての講義を行った。休日にもかかわらず、熱心な学生が30名ほど出席し、真剣に受講してくれた。教員採用試験の面接等に役立つように集団面接をやってみれば、これまた予想を遙かに上回って上手である!!!まさに新たな発見と感動の連続であった。若いエネルギーをいっぱいもらうことができ、幸せな時間を過ごすことができた。教えることのすばらしさを再認識することができた。

「先生の授業を受けて教採に対する意気込みが強くなりました」「先生方の一生懸命な姿に感動しました。私も先生方のような先生になれるように努力していこうと思います」「先生方の姿を見ていると、教職の素晴らしさがひしひしと伝わってきます。自分が教壇に立っている姿を想像しながら、先生方のようにいたいなと胸膨らみます」。最後の講義後の感想に書かれていた言葉である。私の方が逆に勇気づけられるとともに、次回の講義への意欲がふつふつと湧き上がってきた。

このような機会を与えてくださったことに感謝し、最後にもう一度声高らかに叫びたい・・・。

「香川大学生万歳！」



「ハニカミ軍団」(彦星&最後の講義に出席していた学生たち) 2007.7.7撮影

退任・着任のご挨拶

教育実践研究を総合するセンターの発展を願う

数学教育 長谷川 順一

教育実践研究というとき、そこには2つの意味を読み取ることができる。1つは教育実践の研究であり、もう1つは教育の実践的研究である。前者には教育実践を対象とした研究、例えば実践記録の分析などが含まれる。後者は、実践を通して研究課題を検討しようとするものである。後者は前者に含まれるが、後者では「実践」が必須の要件となる。教育の場では常に実践が行われているが、教育実践を計画し実施し省察・検討を加えること、さらに計画・実施・検討のプロセスを研究的視点から組織することが求められている。本センターの主要な任務の1つとして、そのような研究を総合的に支援し指導することがあげられる。教育実践研究の総合的支援・指導の中心として、本センターが一層の発展を遂げることを願ってやまない。

教科間の「総合」の推進のために

理科教育 北林 雅洋

香川大学に着任して4年目。この間、「センター」のおかげで助かったことがいくつかありました。一つは、「学力評価に関する研究プロジェクト」に参加させていただいたこと。他教科の先生方との研究会はとても刺激的で、私自身の理科教育論を、教育論一般の中に位置づけながら吟味する、とても貴重な機会となりました。もう一つ、理科以外の小・中学校教科書の検討を、センター事務室に三日間ほどおじゃまして行なうことができました。学内で、全教科の教科書が揃っているのはここだけ。その検討の結果はおもしろい発見がいくつもあり、初等理科教育法の授業の素材になるばかりでなく、学会発表にもつながりました。委員として何ができるのかまだよくわかりませんが、まずは私自身が「助かった」ことをしっかりとふまえていきたいと思えます。よろしくお願ひします。

「子どもたちとともに」

三木町立平井小学校 教頭 臼井 隆

18年度1年間という短い期間ではありましたが、学生の皆さんとともに楽しい時間を過ごすことができ、このような機会を与えてくださった大学関係者の方々に厚くお礼を申し上げます。講義では、「学校現場」において学級の子ども一人一人を理解することが大切であることや、学級内で様々な問題が起こったときは、子どもを本当に理解した上で、指導や支援することができるかどうかを自問自答すること、教職に就いたときは「人と人とのつながり」「努力の大切さ」「仲間・団結の大切さ」「自信を持つということ」など、子どもたちに伝えて欲しいことなどを一緒に考えました。現場に戻った今、「子どもたちとともに」を自分へのエールとして一生懸命頑張っていきたいと思えます。今後ともどうぞよろしくお願ひいたします。

1 / 4 世紀ぶりの香川大学

附属教育実践総合センター 客員教授 安藤 紳一

昭和57年3月、香川大学教育学部を〇〇な成績で卒業しました。それ以来、ずっと中学校の教壇に立ち続け、香川の明日を担う子どもたちの夢と希望と一緒に追いつけてきました。その間、教育界も大きく変動し、教師という仕事の大変さがますますクローズアップされる時代になってきました。

平成17年4月、香川県教育委員会に勤務し、その感を一層強く持ちました。学校現場の先生方は、子どもたちのために一生懸命やってくれているのに、なかなかその思いが伝わらない……。このままでは、教員を目指す若者がいなくなるのではないかとの思いに駆られることも度々ありました。

そして、平成19年4月、母校香川大学に戻ってきました。今度は、明日の教育界を担う若者の夢と希望を膨らませるのが私の使命です。「絶対に教師になる」という強い志を持った学生を1人でも多く送り出すための手助けをさせていただきたいと思います。よろしくお願いします。

附属坂出中学校長として学んだことを生かして

附属教育実践総合センター 七條 正典

附属坂出中学の校長としての仕事は、私にとって貴重な経験となりました。日常の教育活動や様々な行事を通して附属の生徒たちの素晴らしさを心から感じ取ることができました。最後には、道徳の授業もさせてもらいました。3年間現場で学んだことを、これからの附属教育実践総合センターの活動や学生の指導に生かしていきたいと思っています。お世話になった附属学校の先生方、保護者の方、生徒の皆さんに心から感謝申し上げます。

新たな職責をいただいて

附属坂出中学校 校長 山神 眞一

本年4月から附属坂出中学校校長として着任いたしました。本校は、今から28年前に私自身が教育実習生として学ばせて頂いた思い出深い学校でもあり、何とも言えないご縁を感じています。生徒一人一人と少しでも多く向き合えるように一日一日を大切にしていきたいと考えております。また、伝統ある附属学園の一人として日々感謝の気持ちを大事にして、教職員の方々と協力し合って安心して学べる活気溢れる学校づくりに邁進していく所存です。どうぞよろしくお願い致します。

実践的指導力をもった教師の育成を目指して

附属教育実践総合センター 山岸 知幸

4月より教育実践研究部門に着任しました。専門分野は教育方法学で、学習論や学級経営論を中心に研究してまいりました。今後も授業実践を支える子ども理解や学級経営についての理論的研究を深めるとともに、それを基盤として新たな子どもたちの学びのあり方やカリキュラム開発を追求していきたいと考えています。

近年、とりわけ指導力不足の教員に関わる報道等をよく耳にするようになりました。理論研究と同時に、フィールドワークを大切にしつつ、よりよい授業実践の成立のための諸要因を明らかにし、実践的指導力をもった教師の育成に努力していきたいと思っています。学部・附属学校の先生方のご指導も賜りつつ、努力していきたいと思っています。どうぞよろしくお願い申し上げます。

寄贈図書(07/03~07/07)

- eラーニング等のITを活用した教育に関する調査報告書(2006年度版) メディア教育開発センター
- 諸外国におけるICT活用教育に関する調査研究報告書(2006年度版) メディア教育開発センター
- ICT活用教育における著作権上の課題と対応(2006年度版) メディア教育開発センター
- ICT活用教育に関する個人情報保護及び情報セキュリティの課題と対応 メディア教育開発センター
- 子ども発達教育研究センター紀要 第4号 お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター メディア教育開発センター
- 国際シンポジウム2006報告書 高等教育におけるeラーニングの質保証の展開(日本語版) メディア教育開発センター
- International Symposium 2006 Report (英語版) メディア教育開発センター
- 岡山大学教育実践総合センター紀要 第7号 岡山大学教育学部附属教育実践総合センター
- 教育実践研究紀要 第16巻 鹿児島大学教育学部附属教育実践総合センター
- 山形大学教職・教育実践研究 第2号 山形大学教職研究総合センター
- 教育実践総合センター研究紀要 第23号 山口大学教育学部附属教育実践総合センター
- 北海道教育大学情報処理センター紀要 第11号 北海道教育大学情報処理センター
- 広島国際大学心理臨床センター紀要 第5号 広島国際大学心理臨床センター
- メディア教育研究 第3巻第2号 メディア教育開発センター
- 静岡大学教育実践総合センター紀要 No.13 静岡大学教育学部附属教育実践総合センター メディア教育開発センター
- 教育実践総合センター研究紀要 第16号 奈良教育大学教育学部附属教育実践総合センター
- 平成18年度弘前大学教育学部フレンドシップ事業報告書 弘前大学教育学部
- 弘前大学教育学部附属教育実践総合センター研究員紀要 第5号 弘前大学教育学部附属教育実践総合センター
- 中等教育研究紀要 第53号 広島大学附属中・高等学校
- 中等教育研究開発室年報 第20号 広島大学附属中・高等学校中等教育研究開発室
- 千葉大学教育実践研究 第14号 千葉大学教育学部附属教育実践総合センター
- 高知大学教育実践研究 第21号 高知大学教育学部附属教育実践総合センター
- 教育実践研究 第15号 福岡教育大学教育学部附属教育実践総合センター
- 教育実践研究別冊 教育養成大学としての教育のあり方(8) 第1分冊 福岡教育大学教育学部附属教育実践総合センター
- 教育実践ハンドブッカー教育実習の手引き一平成18年度版 福岡教育大学教育学部附属教育実践総合センター
- 教育実践総合センター「実践報告」No.45 「体験的学習と教材研究・開発一臨床教育学の観点から」 福岡教育大学教育学部附属教育実践総合センター
- 教育実践総合センター「実践報告」No.46 「今後の生活科・総合的な学習の時間のあり方～子どもの学びから見直したときの価値～」 福岡教育大学教育学部附属教育実践総合センター
- 教育実践総合センター「実践報告」No.47 ラウンドテーブル・ディスカッション「河鍋好一理事と語り合う」 福岡教育大学教育学部附属教育実践総合センター
- 琉球大学教育学部障害児教育実践センター紀要 第8号 琉球大学教育学部附属障害児教育実践センター
- 学校教育総合研究センター年報 第6号 上越教育大学学校教育総合研究センター
- 特別開発研究プロジェクト報告書 東京学芸大学教育実践研究推進機構
- 家庭・学校・地域における発達危機の診断と臨床支援II 最終総合報告書 お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター
- 「大学と教育現場の協動的教師教育プログラム」成果報告書(CD形式) 兵庫教育大学大学院
- 教育実践総合センター紀要 第6号 長崎大学教育学部附属教育実践総合センター
- 熊本大学教育実践研究 第24号 熊本大学教育学部附属教育実践総合センター

- 第12回研究シンポジウム報告書 教育実習生に求められる資質能力とは
熊本大学教育学部附属教育実践総合センター
- 平成18年度熊本大学教育学部フレンドシップ事業報告書 実施・成果報告書
熊本大学教育学部附属教育実践総合センター
- 佐賀大学教育実践研究 第23号 佐賀大学文化教育学部附属教育実践総合センター
- 愛知教育大学教育実践総合センター紀要 第10号
愛知教育大学教育学部附属教育実践総合センター
- 平成18年度「子どもとふれあい体験」実施報告書
富山大学人間発達科学部附属人間発達科学研究実践総合センター
- 鳴門教育大学実技教育研究17 鳴門教育大学実技教育研究指導センター
- 花園大学心理カウンセリングセンター研究紀要 創刊号
花園大学心理カウンセリングセンター
- I M E T S No.162 (財)才能開発教育研究財団
- 鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要 特別号3号
鹿児島大学教育学部附属教育実践総合センター
- 北海道教育大学教育実践総合センター紀要 第8号 北海道教育大学教育実践総合センター
- 平成18年度学校経営研究プロジェクト報告書 北海道教育大学教育実践総合センター
- 心理臨床事例研究 第3号 愛媛大学教育学部附属教育実践総合センター
- 鳥取大学生涯教育総合センター研究紀要 第3号 鳥取大学生涯教育総合センター
- 心理相談研究紀要 第5号 神戸親和女子大学心理・教育相談室
- 京都大学大学院教育学研究科附属臨床教育実践研究センター紀要 第10号
京都大学大学院教育学研究科附属臨床教育実践研究センター
- 群馬大学教育実践研究 第24号 群馬大学教育学部附属学校教育臨床総合センター
- 三重大学教育学部附属教育実践総合センター紀要 第27号
三重大学教育学部附属教育実践総合センター
- 宇都宮大学生涯学習教育研究センター研究報告 第13・14・15合併号
宇都宮大学生涯学習教育研究センター
- 東京学芸大学教育実践研究支援センター紀要 第3集
東京学芸大学教育実践研究支援センター
- 教育方法学研究(日本教育方法学会紀要)第32巻 日本教育方法学会
- 埼玉大学教育学部附属教育実践総合センター紀要 No.6
埼玉大学教育学部附属教育実践総合センター
- だいがくにおける学生の質に関する国際比較研究-教育の質保証・向上の観点から-
大阪大学大学教育実践センター
- カリキュラム研究 第16号 日本カリキュラム学会
- 平成18年度「フレンドシップ事業」1年次教育実習カリキュラム開発研究(8年次)報告書
新潟大学教育人間科学部附属教育実践総合センター
- 平成17年度新潟大学フレンドシップ事業報告書 社会的教育施設・団体と連携する「体験的カリキュラム」の研究開発-第9年次研究-
新潟大学教育人間科学部附属教育実践総合センター
- 平成18年度「フレンドシップ事業」報告書 「研究教育実習」の多様な展開(Ⅲ)
新潟大学教育人間科学部附属教育実践総合センター
- 平成19年度「フレンドシップ事業」報告書 新潟市教育委員会との連携協力による「学習支援ボランティア」派遣事業の実施(4年次)
新潟大学教育人間科学部附属教育実践総合センター
- 平成18年度「フレンドシップ事業」 第2回キャリア教育研究会実施報告書
新潟大学教育人間科学部附属教育実践総合センター
- 新潟市教育委員会と教育人間科学部の連携による「12年経験者研修」プログラム・教材開発研究-第3年次研究報告-
新潟大学教育人間科学部附属教育実践総合センター

【センター活動報告 (07/04~07/07)】

- 4月3日(火) 第一回専任会議
- 4月6日(金) 第一回フレンドシップ実施専門委員会
- 4月24日(火) 第二回専任会議
- 4月25日(水) フレンドシップオリエンテーション
- 5月9日(水) フレンドシップ事前研修
- 5月18日(金) 第一回企画推進委員会
- 5月22日(火) 第三回専任会議
- 6月7日(木)~8日(金) フレンドシップ野外教育体験活動(屋島少年自然の家)
- 6月12日(火) 教育実践集中講座(6月期1回目)
- 6月15日(金) 第一回編集会議
- 6月19日(火) 教育実践集中講座(6月期2回目)
- 6月26日(火) 第四回専任会議
- 6月29日(金) 第二回編集会議
- 6月30日(土) 教育実践集中講座(6月期3回目)
- 7月7日(土) 教育実践集中講座(6月期4回目)
- 7月9日(月) 第二回企画推進委員会
- 7月11日(水) 第二回フレンドシップ実施専門委員会
- 7月11日(水) 第一回管理委員会
- 7月17日(火)~19日(木) フレンドシップ野外教育体験活動(国立室戸少年自然の家)
- 7月25日(水) フレンドシップ野外教育体験シンポジウム

【センターからのお知らせ】

教科書(小・中学校)

今年度は、公立小・中学校で使用されている教科書(各教科)各2社を購入予定です。

センターでは、小・中学校の教科書・指導書を全教科そろえております。先生方におかれましては関係の学生に周知していただき、いろいろと活用していただきたいと思っております。なお、貸出はしておりませんのでセンター事務室にて見ていただくことになります。ご周知のほど、宜しくお願い致します。



教育実践総合研究第16号原稿募集

『香川大学教育実践総合研究』第15号は、11月30日(金)原稿受付締切です。以下の投稿要領を参考に、奮ってご投稿ください。なお、投稿要領の7(投稿原稿の取り扱い)が変更となっております。ご確認ください。

香川大学教育実践総合研究投稿要領

1 (投稿の要領)

香川大学教育実践総合研究(以下「教育実践総合研究」という。)への投稿については、「香川大学教育学部研究報告規程」による他、この要領の定めるところによる。

2 (投稿の内容)

教育実践総合研究は、教科教育、教育臨床など広く教育実践に関する独創的な研究論文・実践報告、資料(研究ノート、研究動向の紹介など)及び香川大学教育学部附属教育実践総合センターの活動報告などを掲載する。

3 (投稿者)

教育実践総合研究に投稿できる者は、「香川大学教育学部研究報告規程」による他、香川大学教育実践総合研究編集会議(以下、「会議」という。)が特に依頼した者とする。

4 (投稿原稿の提出方法)

投稿原稿は、完成原稿とし、原則としてワープロで作成し、ワープロ打ち出し原稿2部と、原稿を保存したフロッピーディスク等を会議に提出する。

5 (投稿原稿の長さ)

投稿原稿の長さは、刷り上がり14頁(1頁は21字×42行×2段)以内を原則とし、偶数頁になることが望ましい。超過する場合は、会議の議を経て認めることがある。

6 (刷り上がり1頁目の形式)

刷り上がり1頁目は、和・英文のタイトル・著者名・所属(所在地)、和文要旨(200字)及びキーワード(5語)を含むものとする。

7 (投稿原稿の取り扱い)

投稿された論文等は査読を行い、会議においてその取り扱いを次のいずれかに決定する。査読者については、会議において決定する。

(1)採録 (2)条件つき採録 (3)返戻

8 (校正)

校正は原則として3校までとし、投稿者において速やかに行うものとする。その際、印刷上の誤り以外の訂正、挿入、削除は原則として認めない。

附則

本要領は、平成元年5月17日から施行し、平成元年4月1日から適用する。

附則

本要領は、平成12年3月6日から施行し、平成11年4月1日から適用する。

附則

本要領は、平成17年12月14日から施行し、平成17年11月9日から適用する。

附則

本要領は、平成19年4月1日から施行する。

香川大学教育学部附属教育実践総合センターニュース

No. 26

発行日：平成19年7月27日

編集発行：香川大学教育学部附属教育実践総合センター 代表者 西原 浩

URL <http://edu-center.ed.kagawa-u.ac.jp/~j-cen/> E-mail : jcen@ed.kagawa-u.ac.jp

[〒760-8522 高松市幸町1-1 Tel. 087-832-1683 Fax. 087-832-1689]